

【博士論文題目】 依田学海研究—漢文小説を中心に

二松学舎大学大学院文学研究科 博士後期課程国文学専攻三年 楊爽

【論文要旨】

本論『依田学海研究—漢文小説を中心に』は、依田学海（一八三三—一九〇九）の小説、中でも漢文小説を主要な研究対象として取り上げている。依田学海は森鷗外に漢文を教え、幸田露伴など近代文学者を文壇に送り出した者であるが、文学史における学海の位置づけはまだ十分に認識されておらず、その作品について具体的に論じている研究も乏しい状況である。本論文での検討を通じて、近世から近代への過渡期である明治文壇における依田学海の位置づけから、さらに日本近代文学における依田学海および漢文学の意味の再評価を試みようとするものである。

本論文は、本論三編八章と付論一章、計九章で構成する。なお、依田学海の序文を収集し翻刻した資料集をも作成した。第一編は白話体漢文小説を、第二編は『譚海』を中心に文言体漢文作品について論じた。第三編は、『譚海』を始めとする作品の影響を論じた。

本論の構成は、以下の通りである。

凡例

目次

序章

第一節 漢字文化圏と漢文小説

第二節 依田学海の生涯と著述

第三節 研究史と本論の構成

第一編 白話体作品の意義

第一章 漢文白話体小説の書き手「秋風道人」とは誰か—依田学海の創作活動の一面

第一節 秋風道人とは—『東京柳巷新史』から出発

第二節 『花月新誌』における秋風道人—先行研究への疑義

第三節 『当世新話』と秋風道人

おわりに

第二章 依田学海における白話小説の試み—秋風道人「新橋佳話」の写実と寓意—

第一節 「新橋佳話」の概要

第二節 「新橋佳話」の表現

第三節 「新橋佳話」の風刺の意味

おわりに

第二編 文言体作品の特色

第一章 評伝から漢文小説へ—依田学海『譚海』にみる『名家略伝』の翻案方法

はじめに

第一節 山崎美成に関する先行研究

第二節 山崎美成の自序文からみる『名家略伝』

第三節 『名家略伝』に取材した諸作品

第四節 「田中丘隅」について

第五節 「風外」と「風外禅師」

第六節 『賣酒郎』をめぐって

おわりに

第二章 依田学海の『蝦夷風俗彙纂』受容 —「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠を中心に

はじめに

第一節 「蝦夷三孝子二貞婦」と『蝦夷風俗彙纂』

第二節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「ペロ 龜松」

第三節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「アベハナ」

第四節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「孝多」

第五節 二貞婦の話について

おわりに

第三章 『譚海』における漢文体「実録物」の受容と変容—「孝義復讐」を事例として

はじめに

第一節 竹内楊園について

第二節 関連資料から見る『東毛復讐始末』

第三節 『東毛復讐始末』の作品構成について

第四節 『東毛復讐始末』と「孝義復讐」

おわりに

第四章 依田学海の「合伝」方法——『譚海』にみる『百家琦行伝』の受容——

はじめに

第一節 岳亭五岳と『百家琦行伝』

第二節 『譚海』にみる『百家琦行伝』の諸作品

第三節 『譚海』における「合伝」の様相

第四節 「奇僻」にみる学海の「合伝」方法

おわりに

第三編 作品の影響

第一章 近代における漢文小説の「還流」—依田学海『譚海』と『東海遺聞』の関係を中心に はじめに

第一節 先行研究

第二節 先行研究に対する疑問と問題提起

第三節 『東海遺聞』の出典

第四節 『譚海』とその時代

第五節 「天下才子必読・漢文絶妙編」について

おわりに

第二章 依田学海『譚海』の海外への影響をめぐって—常熟図書館所蔵稿本『海客談瀛録』の 紹介を兼ねて

はじめに

第一節 徐兆璋について

第二節 徐兆璋の日本留学の経緯

第三節 徐兆璋と漢文小説

第四節 『海客談瀛録』の作品出典及び編集状況

おわりに

付論 依田学海と『聊齋志異』—「小野篁」と「蓮花公主」との比較研究を中心に—

はじめに

第一節 「小野篁」と『聊齋志異』との対訳

第二節 「小野篁」と「蓮花公主」との比較

第三節 「小野篁」に対する同時代評

おわりに

終章

資料編 「依田学海序文」集

主要参考文献

初出一覧

序章では、漢字文化圏としての近代日本文化、そうした文化のなかでも近代日本文学史においては漢文小説があまり評価されることがなかった状況、また、そうした漢文小説の書き手である依田学海の生涯を紹介した。

第一編においては、依田学海の白話体漢文小説について考察した。

第一章「漢文白話体小説の書き手「秋風道人」とは誰か——依田学海の創作活動の一面」では、依田学海が秋風道人の号を使ったことを確認したことで、従来の研究では触れていなかった学海の白話体漢文作品を新たに特定した。対象としたのは、成島柳北が主宰する『花月新誌』に掲載されていた「新橋佳話」、「七湯清話」であり、学海がその妻の名前で発表した白話体作品を多く収録している『当世新話』である。

第二章「依田学海における白話小説の試み——秋風道人「新橋佳話」の写実と寓意」では、「新橋佳話」を取り上げ学海の白話体漢文小説を論じた。維新後の新しい世相を反映しているこの作品から、時事への風刺以外に、明治期の演劇改良にも力を入れた依田学海の演劇観も読み解けた。また、『譚海』など硬質の漢文で、『史記』風の人物伝記を書いた学海が、白話体漢文小説まで手がけていたことの持つ意味は大きいと指摘した。

第二編においては、依田学海の代表的な作品と知られている『譚海』を中心に、文言体漢文小説に関して考察した。

第一章「評伝から漢文小説へ——依田学海『譚海』にみる『名家略伝』の翻案方法」では、『名家略伝』は『譚海』の底本となっていることを明らかにした上で、具体的な作品比較研究を行った。従来の評伝に対して、「工夫を凝らし漢文体小説に仕立て上げる学海の記述姿勢」を明らかにした。以下、同様な研究方法で、第二章「依田学海の『蝦夷風俗彙纂』受容——「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠を中心に」では、『譚海』に収められている「蝦夷三孝子二貞婦」の粉本を究明した上で、典拠に対する学海の取り組み方を論じる。典拠と比べると、作品の史実性・時代性を希薄にし、作品の表現を平易化にしたうえ、人物を本筋としている特色があることを指摘した。第三章『譚海』における漢文体「実録物」の受容と変容——「孝義復讐」を事例として」では、学海の「孝義復讐」とその典拠である竹内楊園の『東毛復讐始末』とを比較し、作品の「文芸性」＝フィクション性を指摘した。第四章「依田学海の「合伝」方法——『譚海』にみる『百家琦行伝』の受容」では、『譚海』と粉本「百家琦行伝」とを比較し、『譚海』では、『史記』の「合伝」という表現方法に拠ったことを指摘し、これは近世の評伝作品に新しい可能性を与えたと論じた。また、近代以前の漢文小説との差異を指摘しながら、その近代化された漢文小説として依田学海の小説を指摘した。

第三編においては、『譚海』を始めとする依田学海作品の海外への影響について考察した。

第一章「近代における漢文小説の「還流」——依田学海『譚海』と『東海遺聞』の関係を中

心に」では、依田学海の『譚海』と村山自彊の『天下才子必読・漢文絶妙編』が、明治期中国人留学生たちの手によって、中国にもたらされ、さらにリライトされて、『東海遺聞』が成立したことを論証した。第二章「依田学海『譚海』の海外への影響をめぐって——常熟図書館所蔵稿本『海客談瀛録』の紹介を兼ねて」では、同じく、中国にもたらされ、リライトされた徐兆璋の未刊小説集『海客談瀛録』を取り上げ、徐の日記の記述を基に、それが依田学海『譚海』と菊地純『本朝虞初新志』に拠るものが採られていることを、実証的に示した。これらの作品の存在は、「文化還流」とし、日中文学・文化交流を論じる上で重要な資料であると指摘した。また、中国における近代小説の確立期での、漢文小説という形態が、日本文学との相互関係をもたらししたという事実を指摘した。

付論「依田学海と『聊斎志異』——「小野篁」と「蓮花公主」との比較研究を中心に」では、『新著百種』に掲載された依田学海『小野篁』が、その典拠とした中国古典作品『聊斎志異』の「蓮花公主」との異同に着目して。新しい作品として再構成していく学海の独自の方法には、近代小説としての評価も与えることができると論じた。

結論では、依田学海の翻案という仕事は、その方法や影響から考察しても日本文学の近代化へ貢献した評価すべき漢文小説であると論証されてきた本論を、再度ここで整理した。

資料編において、他の書き手の書物に「序文」として書かれた依田学海の文章を 101 篇翻刻し集めた。